

山を丁寧に管理し、利益を還元する

日高中部森林組合 竹内 忠毅



全国の競走馬の約8割を生産している日高には、ホッカイドウ競馬を開催する門別競馬場があります。その門別競馬場では、“馬ファーストな環境づくり”などを目的とした再編・整備が進められていて、2024年から2028年にかけての4年間で、きゅう舎、検量棟や装鞍所などの開催用施設、きゅう務員の居住施設などが建設される計画となっています。これらの建物にはカラマツ集成材が使われ、カラマツラミナの供給は地元の日高中部森林組合（以下、組合）が中心的に担っています。さらに、新ひだか町で建築が進んでいる新ひだか児童養育相談センターにも組合が供給したカラマツが使用されています。

組合は、造林、造材から木材加工までを一貫して手がけていて、その中で木材加工が組合業務の柱になっています。そこで、組合の業務を担う竹内参事にお話を伺いました。（文責：普及協会・菊地）

■組合の事業概要

組合は造林、造材から木材加工まで行っていますが、2023年度の収益約5.1億円の6割強を製材・加工が占めています。

2023年度の素材生産量は約22,500m³で、カラマツが7割、トドマツが2割、残り1割が広葉樹です。

造材後、伐採跡地に残る枝条は、バイオマス発電用の燃料チップを製造しているひだか南森林組合の中間土場に運んでいます。

組合が所有している木材加工装置・施設を表1に示します。

表1 木材加工装置・施設の設置年

年	装置・施設
1981	小形バーカー 防腐処理装置（水溶性薬剤）
1991	第1製材工場
2001	防腐処理装置（クレオソート油）
2008	第2製材工場

2023年度の製材工場の原木消費量は、16,100m³で、素材生産した針葉樹の一般材はほぼ全量を組合で製材し、さらに近隣の林業事業者や森林組合からも仕入れています。製材工場で製造している製品は、カラマツはラミナが主で、一部に梱包材もあります。トドマツはラミナと梱包材を挽いていますが、その構成割合は年によって異なります。例えば、2023年度はラミナの注文がほとんどなかったことから、もっぱら梱包材を生産していました。

素材生産の際、径30cm上の針葉樹原木が全体の1割くらいは出てきます。第2工場では最大径36cmまで挽けますが、それより太い原木の場合は、手動の製材機で丸太の側を落とし、径を細くしてから製材します。また、生産に追われてこのような手間をかけられない時には丸太のまま保管し、その量がトレーラー1台分くらいになったとき、大径材を挽ける製材工場もしくは合板工場に運んでいます。

製材工場に出るバーク、チップ、オガコは新ひだか町、新冠町の軽種馬牧場や和牛牧場および暗きょ工事用として出荷し、これら地元で使う以外のチップは王子製紙に出荷しています。バークは二次粉碎して細かいものを作っています。これらが馬の敷料や走路に使われているのがこの地域の特徴で、クッション性があり、馬の足への負担が小さいことが好まれているようです。また、牧場によってはバークとチップを混ぜたり、その混合割合が異なっていたりなど、それぞれに工夫されているようです。

防腐処理牧柵は年間350m³ほど製造し、主に地元の牧場で使われています（写真1）。2001年にクレオソート油による処理を始めたのは地元牧場からのリクエストによるものです。これは、馬は柵の木材をかじる癖がありますが、クレオソート油は匂いがあるためにかじらないので長持ちするからです。残念ながらクレオソート油が製造中止になったため、今春からは水溶性薬剤であるマイトレックで処理しています。



写真1 防腐処理した牧柵

表2 きゅう舎エリアの整備内容¹⁾

1区画当たり		全体
きゅう舎	1棟	33区画
倉庫兼事務所	1棟	
競走馬運動場	2か所	
ウォーキングマシン	1基	



写真2 建築中の新ひだか児童養育相談センター

■カラマツの建物での使用例

カラマツラミナは道内外の集成材工場に出荷しています。製造された集成材の日高近隣地域での利用例として、建設から約40年が経過し、老朽化している門別競馬場があります。

門別競馬場のきゅう舎エリアは2024～2025年度の2か年間で表2に示されるような大規模な整備が計画されていて¹⁾、2024年6月にはその事業者が決定しています。建物に用いる木材は、基本的には日高管内産の指定があり、全量をまかなえない場合には道産材も認められています。その量は、2024年度はラミナベースで1,800m³となります。2026年度からは来場者エリア、住居エリアでも建物の整備が計画されていて、そこでも地域材の活用が見込まれています。

組合では、1,800m³のうち、約1,000m³供給します。それらは、(協)オホーツクウッドピアで集成・加工されて戻ってきます。なお、800m³については平取町の工場で作られたカラマツラミナが厚岸町で集成・加工されて使用される予定です。

組合のカラマツラミナは、新ひだか児童養育相談センター(写真2)でも使われています。

■広葉樹原木を生かす

素材生産を行う際、カラマツ人工林の沢筋に良質なメジロカバがあったり、かつての皆伐跡地に天然更新した広葉樹があったりします。これらの現場に組合の担当者が入り、品質を選別し、銘木市もしくは一般材として販売できる価値があると判断したものについては伐採方法を指示し、材としての活用を図っています。それらは、組合が扱う広葉樹原木全体の2～3割程度になります。

伐採した原木は土場に運び、木の形状を確認しながらどこで切るかを見定め、チェーンソーやグラブソーで玉切りします(写真3)。時には40cmを超える丸太が得られることもあります(写真4)。

銘木市に出品したときには市に足を運び、落札価格を確認しています。また、組合が出品した以外の丸太についても、丸太の状態と落札価格を知るようになっています。足を運ぶことは、“このような状態の丸太で、このような価格が付くことがあるのだ”，と知る機会になります。このような積み重ねが、山に入り、個別に伐採する広葉樹を選んだり、伐採位置を判断したりする際の糧になっています。

銘木市の落札結果は所有者さんに報告し、喜んでもらえています。



写真3 目を利かせ、良質な原木を採材する



写真4 径40mを超える原木

活用するためには、このような林業を知ってもらう活動を、ささやかではあっても続けていかななくてはならないと考えています。



写真5 高校生に林業を知ってもらう取り組み

■林業を知ってほしい

組合では、ハーベスタによる伐採・玉切り、製材工場での製材作業を、町立高静小学校の6年生や静内農業高校の1年生に見学してもらう機会をつくっています（写真5）。また、幼稚園の子どもとホダ木でキノコを育てる取り組みも始めています。これらは、地元の子供達に林業を知ってもらいたくて始めたことです。同じ思いで、2022年4月からインスタグラムを始め、現在では400名以上の方々にフォロワーになっていただいています。よろしければ一度訪ねてみてください。

（日高中部森林組合 (@hidakatyubumorigumi)）。

現在、子ども達が職業を選択する時、林業という業種は頭に浮かばないと感じています。そもそも、林業という職業分野があることさえ知られていないかもしれません。

身近な森にはたくさんの木があって、それを育てたり、利用したりすることは大切で、それを担っている仕事がある・・・地域の森を健全に維持し、持続的に

参考資料

- 1) 北海道農政部競馬事業室：令和5年度第2回北海道地方競馬運営委員会資料，門別競馬場の基幹施設整備に向けて，2024.